

1. 「中国模式」の衝撃 2. 「二つの国の狭間に生きる」 3. 「チベットの祈り、中国の揺らぎ」
4. 「今、知っておきたい 真の中国」 5. 「中国でお尻を手術。遊牧夫婦、アジアに行く」

1. 「中国模式」の衝撃 近藤大介著 平凡社 1月13日

副題 : 「チャイニーズ・スタンダードを読み解く」 帯の言葉 : 「アメリカン・スタンダードvs中国模式

日常生活、ビジネスから外交戦略まで、いまの中国を貫く 独自発展モデルを知らなければ、この国とは渡り合えない」

近藤大介氏のこの著書は、中国事情をあまり知らない日本人が読むには、適当な本である。ただし、新聞やテレビの中国関連ニュースを注意深く見ている人ならば、あえて買ってまで読む必要はないであろう。本文中には、常識的な中国事情が羅列してあるのみで、近藤氏独特の視点や中国の未来の大胆な予測などは皆無である。

ことに第1章の北京の日常生活の描写は、あまりにも誇張されすぎている。私は上海のマンションでかなりの時間を過ごしているが、たまに停電や断水、エレベーターの故障などのトラブルに見舞われることはあっても、それは日常茶飯時ではない。多くのマンションで不断に内装工事が繰り返されているが、それはだいたい朝8時から夕方6時ごろまでであり、近藤氏が書いているように深夜に行われ、騒々しくて眠れないということはほとんどない。また本章の、「確かにこの措置によって、北京市内の新築マンションの価格は下げ止まった」(P. 31)という文章は、意味不明である。

近藤氏は第2章で、中国ビジネスなどについて論じているが、その範囲は日本人駐在員に関連した大企業の商業ビジネスに限定されており、これまで中国ビジネスの主役であった中小企業の工場経営者や、その現場でのビジネスなどにはまったく触れられていない。これでは中国ビジネス一般を語ることはできない。しかも近藤氏は、「中国ビジネスで失敗している会社は千差万別だが、成功している日本企業は、ある共通の“必勝パターン”を持っている。それは、中国の現地法人の運営をトロイカ体制にしていることだ。つまり三者の異なったタイプの日本人の合議制により、重要な決定を下していくのだ」と書いている。これは間違いではないが、「成功している一流商社ビジネス」とその範囲を限定しておくべきである。なぜなら中小企業では、とてもそんな余裕はなく、その三者分をすべて自分1人でこなさなくてはならず、場合によっては工場長なども兼任しなくてはならないからである。そしてそのようにして中国で大成功している日本の中小企業がたくさんあるからである。

また近藤氏は、本文中で2度、「マオ」(ユン・チャン著)を引用して、毛沢東に言及しているが、ユン・チャン氏のこの書は、なにかと問題視されており、引用するには適切ではない。また最近起きた温州での民間金融についての記述も、それを「サラ金」などと書いており、事態を正確に伝えていない。現在、中国全土で、高利貸しやネズミ講まがいの民間インフォーマル金融が蔓延しており、それを「サラ金」などという言葉で記すのは読者に誤解を与えるものである。近藤氏は人民元の国際化についても、かなりのページを割いて記述しているが、資本の自由化や為替管理の緩和についての見通しについては語っていない。

近藤氏は第4章で中国の今後の政治状況を占っているが、「ではなかったかということだ」、「示唆している」、「これは想像だが」、「ここからは私の推測だが」、「いこうとするだろう」、「いずれにしても、来る習近平時代の中国は、風雲の時代になる気がしてならない」などという文句の羅列で、新鮮な情報は少なく、あまり参考にはならない。

なによりも近藤氏は、中国を金満国家として持ち上げ、「いまや G7の時代は終焉を迎え、新たな G2(米中)の時代が始動したことは、誰の目にも明らかだ」と書いている。この認識は明らかな間違いである。現実に中国経済には、昨年末からすでに陰りが見えてきている。中国を金満国家のように誤認するのは、中国政府の発表する経済統計数値や中国の表層部分だけを見ているからである。中国は日本とは違い、外資に全面的に依存して今日まで成長を遂げてきたのであり、今後も外資を取り込むことによって、引き続き成長を成し遂げようとしている国家なのである。つまり中国という金満国家の財布は、そのかなりの部分が外国企業の資金でふくらんでいるのであり、今後もそれを保ち続けなければならない宿命なのである。

2. 「二つの国の狭間に生きる」 長谷川暁子著 同時代社 2012年1月10日

副題 : 「長谷川テルの遺児暁子の半生」

帯の言葉 : 「母は戦火の中、反戦を呼びかけたエスペランチストだった。日中の“混血児”と呼ばれ、

しかし烈士遺児として中国で育った若者が、歴史の奔流の中で見たもの、うけとめたものとは」

著者の長谷川暁子氏は、「革命烈士: 緑川英子」の遺児として、建国後の中国である種の優遇を受けながら、同時に日本人との混血児として蔑視されながら、40歳近くまでを中国で生き抜いた。その後、長谷川氏は日本に帰化した。この本は長谷川氏自身が描いた半生記であり、本文中には反右派闘争、大躍進運動、文化大革命などの激動の嵐の中

での体験が、身近な出来事として、鮮烈に語られている。

私は昨年、黒竜江省のジャムスに足を運んだとき、そこに緑川英子の足跡を見た。その時は緑川英子についての知識や興味が少なかったので、あまり深く詮索することなくその場を離れてしまった。しかしながらこの本の中で、緑川英子やその夫の劉仁の、ジャムスでの活動のよき理解者であったのが、当時の黒竜江省共産党委員会の幹部であった高崇民であり、その彼が後に高崗事件に連座し、「反党集団の主幹で、満州国や日本人との関わりが深い」という罪を背負い、その座を追われたという記述を読んで、驚いた。なぜなら私の満州に対する一つの興味は、「日本人が育てた満州国の中国人官僚と高崗事件の接点」にあり、この高崇民という人物こそがまさにその一人ではないかと思ったからである。長谷川氏はこの高崇民のおかげで、烈士遺児としての奨学金などを受け、育ったという。残念ながら長谷川氏もこの恩人の高崇民には会えずじまいであったようだ。

長谷川氏は、身近で起きた文革中の李先生の自殺について、「おそらく彼の人生の中で出遭った最も醜い打撃は、信じきったものに裏切られたことであろう。世の中に、信じていたものに裏切られることほど侘びしい憤怒はあるまい。戦友に見捨てられ、だれ一人信じてくれない、だれ一人手を貸そうとしてくれなかった孤独が、彼を絶望させたにちがひなかった」と書いている。たしかに人間にとって、「信じているものに裏切られる」ショックはきわめて大きい。経営者でも、事業に失敗して、それまで苦楽をともにしてきた経営幹部が、いともたやすく自分を裏切り見捨てて行く姿を目にすると、人間不信に陥り、再起不能になる人が少なくない。だから私は、若い経営者には、いつも「すべての人間は裏切る。他人を絶対に信用してはならない。頼れるのは自分のみ。孤独をこよなく愛する人間でなければ、経営者としては成功しない」と強く教える。そして「相手は必ず裏切る。それが人間であると自覚した上で、その相手の裏切りまでも、人間として許容し、信じることが大事である」と、たたみかけて諭す。

できるだけ早く、現代中国情勢研究会で長谷川暁子氏を講師として迎え、この本に書けなかったことなどを含めて、生きた中国現代史を、彼女から学んでみたいと思う。

3. 「チベットの祈り、中国の揺らぎ」 ティム・ジョンソン 著 辻仁子訳 英治出版 10月30日

副題：「世界が直面する“人道”と“経済”の衝突」

帯の言葉：「国を失うこと、心を失うこと。経済成長に沸き立つ人々と置き去りにされる人々。」

侵略から半世紀、ますます深刻化するチベット問題の真実と中国社会的変化を追う

この本は学術書ではない。さりとてジャーナリストの書いた本にしては、文章が生硬かつ冗長であり、最後まで読み通すのに、かなりの忍耐が必要だった。もちろん日本語訳の問題があるのかもしれないが、しかもこの本で著者が訴えていることは、過去においてチベット問題を論じてきた多くの識者とほぼ同じで、まったく違う新たな切り口はない。たしかに多くの取材対象に迫り、貴重な証言を得ているが、チベット問題を解決に導くような決定的なものはない。今までのチベット関連本とあまり代わり映えがしないこの本が、あえてこの時期に刊行されたことは理解に苦しむ。

ティム氏は、「ギャツォはこれまで政策への不満を心の中にしまいこみ、外に出すことはほとんどなかった。それと対称的なのが、チベット人共産党員として最も有名なプンワン・ワンギェルだ。ギャツォとは巴塘県の同じ村の出身だ。もう80代だったがはつらつとした人物で、本名を縮めたプンワンの名で知られる。現在は北京に住み、基本的には表舞台から距離を置き、ときたま訪れる客の相手をして過ごしていた。…」と、プンワンに言及しその果たした歴史的役割を高く評価している。しかしダライ・ラマに接見したとき、ティム氏はわざわざこの二人について質問しているが、ダライ・ラマのプンワンに対するコメントは記していない。ティム氏がジャーナリストを生業としているのならば、「なぜダライ・ラマがプンワン氏へのコメントを避けたのか」について、深く考察する必要があるのではないか。なぜならプンワン氏だけが、毛沢東とダライ・ラマの対話を通訳した生き証人だからである。またティム氏が本当に、チベット問題の真相に迫るつもりだったのならば、北京での6年間の滞在中に、プンワン氏のもとに足を運ぶ機会は、十分にあったと思うのだが、ティム氏はなぜそれを行わなかったのだろうか。この本の、その他の多くの取材がまったく無意味だとは言わないが、残念なことである。

またティム氏のダラム・サラの認識についても、私は違和感を覚える。私は昨年1月にダラム・サラを訪れたが、そこで私が見たものは理想郷ではなく、完全な階級社会であり、そのトップに君臨していたのがダライ・ラマを始めとするチベット層階級、そして一般チベット人の商売人、地元インド人、流入インド人という具合で、最下層の流入インド人が住むスラム街があり、街の清掃などの仕事は全部、その人たちが担当していた。ダラム・サラを理想郷のように描くティム氏は、あの社会状況を目にしなかったのだろうか。もし本当に、ダライ・ラマが素晴らしい宗教家ならば、まさにダラム・サラを階級のない理想郷に作り上げているはずである。

4. 「今、知っておきたい 真の中国」 人民中国スタッフ作 朝日新聞出版 1月16日

中国の国旗と同じ真っ赤な色の表紙の本が、店頭を飾っていた。その色に吸い寄せられるようにして、手に取ってみ

ると、タイトルは、「今、知っておきたい 真の中国」という本であった。中身は“人民中国スタッフ”が作成した画報のようなもので、中国の現状と歴史が要領よくまとめられており、中国をまったく知らない若い人たちには参考になる本だろう。ただし値段は2500円と高く、中国政府の宣伝物ならば、もっと安くすればよいのにと考えた。それにしても「今、知っておきたい 真の中国」という割には、なぜ「今、知っておかねばならないのか」、つまりこの本が、なぜ「今」発行されねばならないのか、その必然性がよくわからない本でもある。

なお本文中には、わざわざ「農民工」という特集ページがある。最近、河南省廬展工共産党書記が、「“農民工”という言葉は差別用語である」と発言しているし、広東省共産党汪洋書記は、「“農民工”という言葉は止めることも検討する」と主張しており、「出稼ぎ労働者の熟練技術者88万3000人に都市戸籍を付与する」という計画も検討している。つまり近日中に、「農民工」が差別用語として禁止される可能性が高く、名実ともに「農民工」という存在がなくなる可能性が高い。そう考えると、デカデカとその名を書いているこの本が店頭から回収される日が遠くないかもしれない。そうするとこの本は「幻の出版物」となり、希少価値が出てくるかもしれない。私はそう考えながら、この本を買い求めた。

毛沢東の評価については、以下のように記し、「過ちを正視しそれを正してこそ、未来の発展は正しい方向を得、人民の支持が得られる。これが人民の信任と支持を得るための中国共産党が守るべき活動の姿勢、方法であり、信条である」と書いている。ただし本文中に1989年の事件はいっさい登場しない。

- ・大躍進の失策に対し、毛沢東は自らの責任について1962年の7000人大会で、「中央が犯した誤りはすべて直接的に私に責任がある。間接的にも私に部分的責任がある。なぜなら私は中央の主席であるから」と述べた。中央指導者として自ら過ちを認め、責任を負い、もつて戒めとする態度は、人民の理解と支持を得た。
- ・「文化大革命」が終わると、中国共産党中央は混乱を收拾し、正常に戻すために奮戦した。「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」は、“文化大革命”を重大な過ちとし、徹底的に否定し、同時に“文化大革命”の過ちは毛沢東に主な責任があると明確に指摘した。

5. 「中国でお尻を手術。遊牧夫婦、アジアに行く」 近藤雄生著 ミシマ社 11月3日

帯の言葉：「年収30万の三十路ライター、人生に迷う」

この本は、30代後半の日本人ライターが、タイ・ビルマ・昆明・上海へと流浪の旅を続けながら、その土地で遭遇した事件や人物などのことを書き連ねたものである。昆明でお尻の手術をしたエピソードが、おもしろおかしく書いてあり、それがそのままタイトルとなっている。

近藤氏は、タイからビルマへ入り、そこから中国国境の街ムーセ(中国名:瑞麗)へ向かい、そこで越境する手はずであった。10年以上前、私もミャンマーから陸路で中国入りを目指したが、それはできなかった。その経験があったので、近藤氏がどのようにして、あのムーセの国境を越えたのだろうかと思い、心を弾ませてこの本を読み進めていたのだが、結局、近藤氏もダメだったようで、再度、タイへ戻りラオス経由で中国へ入っている。近藤氏は肝心のこのミャンマー国境の越境事情について、まったく記述していない。ここにこそドラマがあったと思うのだが、残念であると同時に不思議でもある。

近藤氏は、本文中で、「年収30万円程度のライターである」と自虐的に書いている。できるだけ早い時期に、1人前のライターとなり、日本国家に税金を払い、自立した日本人として生きて欲しいものである。

以上